

第17回 東日本大震災5周年～悲しみの浄化～

大小の差はあれ、全ての日本人に傷跡を残した東日本大震災から5年が経った。避難解除や仮設住宅内部の問題などが取り沙汰されるが、心の傷が癒えるにはまだまだ年月が必要だろう。その5年目の節目に、東日本大震災の被災者を題材とした新作オペラが、1月24日にハンブルグ州立歌劇場で世界初演された。

この『海、静かな海』の作曲者細川俊夫は、現役の日本人作曲家の中で世界的知名度ナンバーワンであろう。演出を担当した平田オリザは、細川氏もハンブルグ州立歌劇場総裁も熱望した演出家だ。そして、指揮者はケント・ナガノである。日系アメリカ人だが、日本人ピアニストと結婚している日本のよき理解者だ。歌手陣には日本を代表するメゾソプラノ歌手藤村実穂子も起用し、日本を最良に表現できるドリームチームを形成していた。

終演後、胸を打たれて立ち上がり、心からの拍手を送る観客達の表情を見ていると、歴史に刻まれるべき意義深い瞬間に立ち会っているという実感が湧いて来る。そして我々日本人と共に、この悲劇を語り継いでいってくれる人達がこれだけ大勢いるということが心の大きな支えになる。

細川氏は次のように語る。「芸術において『悲しみ』は、それが美しく表現された時に浄化されると思っています。今まで、出身地である広島を扱った作品や東日本大震災を題材にした作品を多数書いてきましたが、それらは政治的メッセージとして受け取られることも多くあります。しかし私達音楽家はメッセージを発しても弱い存在です。音楽に乗せて悲しみを溶かし、カタルシスを喚起することにより、魂を浄化していくことでしか、世界を変えていくことはできないと思っています」

「私達作曲家は、日常生活の中で、常に新しい題材を探したり、頭の中で構想を練ったりしているものです。2011年に初演されたベルギーのモネ劇場委嘱作品『松風』も、愛する人を失った悲しみが題材です。そして2013年ザルツブルグ音楽祭で世界初演されたオーケストラとソプラノのための曲『嘆き』は、津波で失った我が子の遺体を毎日海岸で捜し続ける母親の写真に心を打たれて作った曲です。その後も福島放射能汚染や子供を失った母を題材にした曲を作っており、東日本大震災をテーマにした作品群の延長線上に位置する作品として、オペラという形態を取り、ドラマ性を高めたものを作りたいと思っていた矢先、ある出会いがありました」

そのような心境だった2012年11月、当時のスイス・バーゼル市立歌劇場総裁ジョルジュ・デルノン氏が来日中に細川氏に会いに来た。

「デルノン氏は、バーゼル市立歌劇場を年間最優秀歌劇場受賞に導くなど大活躍していましたが、2015年からケント・ナガノさんを音楽総監督に迎え、ハンブルグ州立歌劇場総裁に就任することになり、その記念すべき初の委嘱作品を私に依頼したいというお話でした」

今までも能からインスピレーションを得た作品を書いている細川氏だが、この依頼を受けた頃は丁度、能の伝統的な演目である『隅田川』を下敷きにした新しい作品を作りたいと考えたそうだ。そこで台本・演出は、細川氏の代表的オペラ『斑女』を広島の能舞台で演出した平田オリザ氏に託したいという、細川氏とデルノン氏双方の意見が一致してすぐに決定したという。

しかし完成までの道のりは長かった。まずは平田氏が日本語で台本を作る。それを独訳する。それを元にドイツ人の台本作者（前出の『松風』の台本も書いているハンナ・デュブゲン）にドイツ語の台本を作ってもらった。ここまでに1年半の月日を要した。それから曲を紡ぎ始め、完成したのが丁度8月6日、広島原爆記念日であったのも何かの運命かもしれない。

オペラの総譜が完成した後、指揮者のナガノ氏が譜読みをするも、何か足りないと感じたという。「日本人にとっては自国の、身を斬られるようなテーマでも、ドイツ人にとっては、対岸の火事的な距離感を持っているのは否めない。そのようなテーマを、瞑想音楽のような静けさで描いても、観客の心は掴めないのではないか」。そんな注文を、細川氏はクリスマスの夜中に電話で叩き起こされて告げられた。細川氏は、東日本大震災へのレクイエムのような作品にしたいと思ってきたが、そのような意見を尊重し、嵐を表現する間奏曲が付け加えられた。ドイツの観客に地震を疑似体験させ、このテーマを共有してもらうことを優先したのだ。

さらに稽古が始まると、その間奏曲の一部を冒頭にも流し、一気に観客を地震&津波モードに引き込む策をデルノン氏から提案された。舞台上に鎮座する大きな円形の台は原子炉を、天井から縦に吊るされた蛍光灯の群は、核燃料棒を表現しているの、そこには原子炉の爆発音も表現されていると細川氏は語る。

こうして出来上がったオペラはハンブルグの聴衆に温かく受け入れられた。2年後に再演される予定となっているので、その際は是非観に行ってみてほしい。去る3月14日にはNHKテレビのプレミアムシアターで、20分ほどのドキュメンタリー映像と共に、公演の様子が放映された。再

放送を待ちたい。そして今年は幸運なことに、ベルンで前述の『斑女』がスイスで初上演される。この機会は逃さない。その他ベルギーのモネ劇場とワルシャワでは『松風』の上演が予定されている。

日本を代表する作曲家として世界で戦い続けている細川氏に、そのエネルギーの源を尋ねてみた。「作曲家というのは孤独で、理解されることが少ない職業です。私は海や山がとても好きなのですが、大きな自然の世界の前でゼロになり、人間の原点に戻ると、そこから勇気をもらえます。1回全てを忘れるような場所に立って、大自然の中で沈黙することで感受性を育てることが大切です。それから、音楽でいえば古典音楽など、今まで戦ってきた先人達の残したものに触れることによって原動力が得られます」

「悲しみを別の次元に持っていき、それは祈りに近いものです。そうして人間の感情を高めること、同時代に生きている人間の感情を豊かにすることが芸術家の使命だと思っていますので、実際の公演に接し、観客が泣いてくれているところなどを見ると、その使命を全うできたという喜びが湧いて来ます」

悲しみを浄化させ、自身の魂も再生させたい方は、以下の処方箋をお試し下さい。日本人であることを慈しむことができるでしょう。



オペラ『斑女 HANJO』 細川俊夫 作曲

Kevin John Eduseis 指揮 Florentine Klepper 演出

ベルン交響楽団 www.konzerttheaterbern.ch

Theater Bern 5月22、24、29日、6月1、3、5日